

// 卷 頭 言 //

社会福祉法人 日本ライトハウス理事長
岩橋明子

WBU（世界盲人連合）では地域総会や全体の総会の都度、女性フォーラムが開かれるのが常となっている。視覚障害者・盲人という全般的な取組みの中ではカバーしきれない女性ならではの問題を考え、互いに励まし合うというのがその目的である。また国内的に盲女性の組織がないところではリーダーを養成してその人達を中心に組織を育てて行くことも活動の一つとされている。障害があるだけでも色々と困難なことが多い上に女性であれば一段と差別や不平等が見られるという強い訴えから、女性の地位向上委員会が設置されその活動としてセミナーやフォーラム等が開かれてきた。これは1985年の国際婦人年以降一層活発となり、スウェーデンや国際援助団体の協力や指導でアフリカ、アジア、ラテンアメリカ、中近東等でその地域の盲女性たちの指導者育成のために始まったものである。

わが国では日本盲人会連合（日盲連）の中に婦人協議会があってもう40年以上も活動しているが、盲人協会の中にこれほど前から婦人部がある国は少ない。これは三療や邦楽などに従事して自立している盲女性が多かったのも大きな理由の一つであろう。一般の女性の社会進出が進んでいた諸外国でも視覚障害者については女性の立場は決して強くはなかったようである。ましてや開発途上にある国々、貧困、宗教、階級制度などの影響の強いところではいうまでもない。今会議やフォーラムに参加してくる女性たちは皆明るく発言力も旺盛でそれほど抑圧されているようには見えないけれども、報告される内容は極めて厳しい。男の子は遠くても盲学校にいれたり近くの学校に通わせたりするが女の子は教育を受けさせる必要がないという親がまだ多い国。障害者がいるということ自体を隠そうとする家族。家の奥で一日中何もしないでただ家族のお荷物になっているか、逆に少し大きくなると町に出て僅かなお金のために体を売る。彼女たちの人間としての尊厳と権利を守るためにも教育と就業の機会を与えようという要望は毎回繰り返されている。カントリー・レポートで「日本では教

育はすべての子供達に門戸が開かれている。かなりの数の視覚障害者が三療に従事しその他の仕事に就く人達も増えている。年金制度は確立している。婦人協では毎年全国大会を開き、各支部ではそれぞれ勉強会や趣味の集まりを楽しんでいる。既婚者も多いが、家族やヘルパーの協力を得ながら立派に子育てもしている。」などと報告しても、苦しい人達には絵空事のようにしか響かないかもしれない。日本でも視覚障害者のみならず一般女性が抱えている問題は決して少なくない。仕事と家庭の両立、家族の問題や介護、職場での男女差別やセクハラなど議論されてはいるが、最低限の人権すら保障されていない人達とは余りにも格差が大きくて同じ地盤に立って話し合うことが難しいのかもしれない。また日本人、特に一定以上の年齢の女性はなかなか本音をぶちまけて外国人と話したり議論したりするのが得意でない面もある。もっと突っ込んで考えると、自分のおかれた立場や条件をなんとなく受け入れてしまってあまり問題意識を持たない傾向があり、むしろそれが女性らしさと考えていることも否めない。とにかくこうしたフォーラムや会議では日本代表は大変おとなしくて、他の参加者たちにとっては物足りない印象を与えてしまっている。

国際会議や海外視察を通して何かを学び、取り入れるというのが今まで長い間の目的であったが、そろそろ立場を変えてみる時期ではなかろうか。発展段階で努力している人達に対してなにかできることはないのか、何が求められているのか、同じ基盤まで降りて話し合うことで何か見付かるかも知れない。女性問題はそれぞれの国や地域の伝統、文化、社会的要素等が絡む複雑な面を持つだけに部外者が簡単に介入できない難しいところがあるが、一步先に立つものとして元気づけ慰め共感することで、彼女たちが意欲や希望を持つことができるかもしれない。それには若い世代の人達の力が是非必要だと思う。斎藤百合、栗津キヨさん達の名前は海外でも知られていて、特に栗津さんは盲女性の会合にも日本から参加されたことがあるだけに後に続く人はいないのかと聞かれることもあったりして返答に窮している。身近なことや目の前のことにのみ縛られずに、国際的な場で活躍する広い視野を持った人が育ってほしいと願うと共にそれを育てるような土壌を作らねばならないと痛感している。去る6月、ソウルで開催されたWBU東アジア・太平洋地域会議に出席した感想の一端である。